看護部だより

身体的拘束最小化チームの紹介

看護部　副看護部長
脇坂　清美

入院生活の中で、患者さんの安全を守るために「身体的拘束（からだの自由を制限する行為）」が必要になる場合があります。たとえば、転倒を防ぐためにベッドに柵を付けたり、点滴を自分で外さないように抑制帯を使ったりすることです。

しかし、身体的拘束は患者さんにとって不自由や苦痛となり、心身に悪い影響を与えることがあります。

そこで当院では、「できる限りの身体的拘束を行わずに患者さんの安全を守る」ことを目標に、「身体的拘束最小化チーム」を立ち上げました。患者さんが安心し、尊厳を保ちながら治療が受けられるように、チーム一丸となって取り組んでいます。

身体的拘束とは？

身体的拘束とは、患者さんが自分の意思で動くことを制限することをいいます。

・ベッドからの転落を防ぐために手足を抑える
・点滴やチューブを抜かないように腕を固定する
・車いすから立ち上がらないようにベルトを用いる

これらは、一時的に必要となる場合がありますが、長時間続くと、

・筋力の低下や動きにくさ
・強い苦痛や怒りの気持ち
・認知症の患者さんには混乱や不安を悪化

など、患者さんに大きな負担を与えることが知られています。

身体的拘束最小化チームとは？

当院では、医師・看護師・リハビリスタッフ・薬剤師・管理栄養士・臨床心理士などの専門職が集まり、**「できる限り身体拘束をしないで患者さんに安心して医療が提供できる」**ことを目指しています。

チームの活動は

- 入院患者さん一人ひとりの状態を直接見に行く
- 身体的拘束を使わずに安全に守れる方法をチームで検討する
- 身体的拘束以外の代替え手段（見守り、環境の整備、声かけなど）をチームで検討する
- 転倒転落予防のために患者さんと一緒に療養環境を整備する
- 患者さんとの対話や声かけをして工夫して安心感を高める
- 院内での研修や事例検討を通じて、スタッフの意識向上と技術の向上を図る

「どうすれば患者さんが安心して医療を受けられるのか」病棟の看護師を交えて、チームで話し合いながら療養環境を工夫しています。

身体的拘束を減らすための工夫

1. 環境を整える

ベッド周囲の危険を取り除く、ナースコールを押しやすい場所に置く、履物はベッドサイドに揃えておく等、安全に過ごせる病室環境を整えます。

＊履物は、かかとがあるものをご準備ください。

2. コミュニケーション

混乱や不安の強い患者さんには、やさしく丁寧に声かけ、安心できるかかわりを大切にします。

3. 身体機能を保つ

リハビリを取り入れ、できる限り「自分でできること」を維持して頂きます。

4. ご家族との協力

身体的拘束を最小化にするためには、ご家族のご理解とご協力は欠かせません。

面会時のご家族のやさしい声掛けが患者さんの不安を軽減し、安心してもらえます。

少しでもご自宅での環境に近づくようになじみのもの（カレンダー、家族写真、時計、本、趣味の道具等）をご持参いただけるようにご協力をお願いします。

さいごに

身体的拘束は決して望ましい方法ではありません。その中で、急性期医療という特性上、やむを得ず「身体的拘束」を行う必要が生じる場合があります。例えば、意識が混濁している方が大事なチューブや点滴を抜いてしまう、ベッドから転落しまうなど、命に関わるリスクがある場合は最小限の身体的拘束を行うことがあります。身体的拘束を必要とする場面があることもご理解いただきつつ、それを最小限に短い期間に抑えるための活動も行っていることを知っていただければ幸いです。

私たちは、皆さまの大切な命を預かるものとして、責任と誇りを持って日々のケアに取り組んでいます。

これらも患者さんの尊厳を守り、安全と安心を両立する医療が提供できる環境づくりを目指して活動します。